

GEOPARK

magazine

2021 Vol.8



日本ジオパークネットワーク

【巻頭特集】

ジオパークを旅する

三笠／おおいた姫島／阿蘇／萩

【特別企画】

おいしい恵み・GEOの手仕事

世界のジオパーク

アイスランドのユネスコ世界ジオパーク

もっと知りたい GEO

火山は、水の沸騰で噴火する

読者
プレゼント

ジオパークの
逸品せいぞろい

GEO PARK magazine 2021 Vol.8



「ジオ」は「地球・大地」。その土地の自然、歴史、文化をまるごと楽しむことのできる「大地の公園」がジオパークです。

CONTENTS

2 大地の力がつくる美景

9 巻頭特集

ジオパークを旅する

20 世界のジオパーク

アイスランドのカトラユネスコ世界ジオパーク

26 ユネスコ女子、
ジオパークを語る

30 GEOPARK の植物 苗場山麓ジオパーク

31 特別企画

おいしい恵み

38 GEOPARK magazine TOPICS

8月22日はジオパークの日

39 GEO の手仕事

46 もっと知りたい GEO

49 ジオミニ事典

50 ジオの人

55 ジオパークのお土産

58 読者プレゼント

62 日本ジオパークネットワークマップ

64 奥付



表紙の写真：エゾフクロウ

北海道内に生息するエゾフクロウ。雛のころは茶色っぽい、ふわふわの綿毛が可愛らしく、大人になると茶褐色が混じった美しい白い羽毛になります。三笠ジオパークのある三笠市内でも木々のある所で見られます。表紙は、雛同士が仲良くじゃれ合っている様子を撮影したものです。

写真提供：岸本日出雄

フォトグラファー 岸本日出雄

(株)札幌コマースフォト代表、APA日本広告写真家協会正会員、SSP日本自然科学写真協会会員。北海道の自然、野鳥、野生動物など、北の大地によって育まれる、その輝きに魅せられ撮り続けている。



大地の力がつくる

美景

ジオパーク各地で見られるすばらしい景観……。それらの多くは、地すべりや山体崩壊など自然の力が造り出したものです。人にとっては、時に「災害」となる現象が、私たちを感動させる自然の造形美をもたらしてくれるのです。

古代の海岸線は、
地すべりでスキー場に

苗場山麓ジオパークを流れる信濃川。その左岸に広がる東頸城丘陵地域は、260万年〜220万年前ごろの古日本海の海岸線付近でした。そのため泥層、砂層、れき層、火山灰層、亜炭層などの地層が見られ、昔から地震などによる地すべりが多発してきました。その痕跡が、すばらしいスキー場となつて、私たちに新たな喜びをもたらしてくれます。



磐梯山の岩なだれが
もたらした、300もの湖沼群

磐梯山ジオパークの特徴の一つは、豊かな表情で見るものを魅了する湖沼群。それらは、磐梯山の規模な山体崩壊が造り出しました。磐梯山は、約5万年前と1888年の少なくとも2度、大規模な山体崩壊を起こしたといわれます。写真の磐梯火山の内部が見わたせる崩壊壁と銅沼の風景は、1888年の時に誕生。また銅沼とそれを水源とする五色沼湖沼群は磐梯山ジオパークを代表する景勝地です。



地すべり地の土壌は ブナ自然林の癒しを育む

日本海と世界遺産白神山地に囲まれた八峰白神ジオパーク。ここには、気軽に立ち入り、森林浴ができるブナ自然林が広がっています。留山と三ツ森に広がるブナ自然林を育んできたのは、地すべりにより堆積した土壌。留山のブナ自然林は、江戸時代から水源地として保護され、ブナの伐採が禁じられてきました。現在では、人と自然がふれあい、共存する場として大切にされています。

八峰白神ジオパーク Happo-Shirakami Geopark
八峰白神ジオパーク推進協議会 TEL: 0185-76-4605

さあ、行くこう！ 一億年時間旅行へ

北海道三笠市全体を
エリアとする三笠ジオパーク。
アンモナイトなどの化石を
多く産出するほか、
北海道の石炭と鉄道の
発祥地でもあり、
大人も子どもも楽しめる
魅力満載のジオパークです。

日本の高度成長を支えた 炭鉱の歴史を今に

今回訪れたのは「野外博物館」。ここでは、三笠ジオパークを知る上で欠かせない炭鉱の歴史や、北海道がどう形成されたのかを教えてください。大地の様々な記憶を、歩きながらたどることが出来ます。案内板などを見ながら自分で歩くこともできますが、知識欲を満足させるにはやはり、ガイドさんと巡るのが一番。

今回案内してくれるのは、三笠ジオパークガイドの下村圭さんです。早速歩き始め、まず目に留まったのは「森林鉄道跡」。「この森には良質なエゾマツやトドマツが生育し、江戸時代から多くの木こりが行き来していました。昭和30年代初めまで木材を運び出すために使われていたのが森林鉄道です」と下村さん。

石炭の発見も、明治時代に林業で出入りしていた人々によるものだそう。このことで人の往来が盛んになり、明治15（1882）年に開かれた市来知村が、三笠市の始まりとなりました。

そんな三笠市誕生の歴史を聞きながらさらに歩を進めると見えてくるのが、「旧幾春別炭鉱錦立坑櫓」です。「立坑櫓は、石炭を運び出し、炭鉱夫を地下へと運ぶエレベーターの役割を持っていました。炭鉱で働いていた人たちは、とても暑く、さらに落盤やガス漏れの危険のある地中で、真っ黒になって石炭を掘っていたんです。それが、日本の高度成長を支えたんですね」。櫓の周辺には変電施設や巻き上げ機が置かれた部屋も残り、ここで働いていた人々の息遣いが、今も聞こえてくるようです。

大正9（1920）年に完成した旧幾春別炭鉱錦立坑櫓は、現存する中では北海道最古。日本の近代化産業遺産「北炭幌内炭鉱・幾春別炭鉱関連遺産」の構成資産の一つ